

# ミャンマー歳時記

写真・文 兵頭千夏  
Chinatsu HYODO



第1月はダグー月 水をかけあい汚れを落とし、新年を迎える

ミャンマーは古くから独自の暦を用い、自然の変化に沿って一年を過ごしている。日本の旧暦と同様、月の満ち欠けに沿った太陰暦を採用し、曜日や日付にとられない生活時間を送っている。

ひと月に一度は祭りや儀礼があるといわれ、それらは満月の日に開催されることが多い。八割以上が敬虔な仏教徒だから多くが仏教行事に関連している。さらに多民族国家であることから民族ごとの行事も存在し、イベントはもう無数。楽しむことを実践する彼らの時間の流れ、歳時記を通して紹介しよう。

第一月は新年を迎えるダグー月（太陽暦三月から四月頃）。ミャンマーの新年は一月一日ではない。祝祭行事は満月の日に行われることが多いが、新年だけは月の満ち欠けに関係なく毎年占星術によって決められていて、近年はだいたい四月一七日になっている。二〇一六年も同日にミャンマーの暦一三七八年の新年を迎える。新年前の四日間、嬉々として互いに水をかけあい一年の汚れを流しあう。この水かけ祭り、いたるところにステージが作られ、そこで踊り歌い、またホースやバケツで行き交う車や人々に容赦なく水をかける。一番暑い季節でもあり、水をかけられて怒る人は誰ひとりいない。

仏教徒にとって尊い月といわれる第二月のカソン月（四月から五月頃）。この月の満月の日にお釈迦様が生まれ、悟りを得て、そして入滅したからだ。お釈迦様は菩提樹の下で悟りを得たことから仏塔や地区ごとに育てられている菩提樹の幹に水をかけるお祭りが満月の日に行われる。お釈迦様が悟りを開いてくれたことを仏





カソン月のお祭りは菩提樹に水をかける



ワーガウン月、タウンビョンの精霊信仰の儀礼

教徒は改めて祝うのだ。この日はあちこちで水壺を持った人たちの姿をみかけるだろう。

第三月のナヨン月（五月から六月頃）は僧侶たちが受けた多くの試験結果が発表される。また、毎年ナヨン月満月の翌日には「ラカイン民族の日」の式典が各地で開かれ、レスリング大会も催され多に盛り上がる。そして、少しずつ雨も降り始め、気温も下がり過ごしやすくな

っていくことに気づくだろう。市場ではマンゴーやドリアンなどカラフルな果物が売られ始める時期でもある。

本格的に雨季が始まる第四月のワーズー月（六月から七月頃）。この月から以後三カ月間を安居といい僧侶は僧院にとどまり修行に励む。多くの仏教徒はこの期間、持戒を心がけ、信仰と対峙する。心静かに真面目に過ごす期間であるからか仏教徒の間では引越しや結婚式は行われない。容赦なく降る雨をみると、控える方が理にかなっているといえそう。満月の日には僧侶に袈裟を捧げる習わしがあり多くの信者が僧院を訪れる。この時期どの僧院も新しい袈裟が山積みになっている。農業に従事する人たちは牛や水牛で田を耕し、女性たちが田植えを始める季節でもある。

第五月はワーガウン月（七月から八月頃）。ミャンマー全土で根強く精霊も信仰されており、第二の都市マンダレー近郊のタウンビョン村では精霊の祭礼が盛大に開かれる。霊媒師は太鼓や銅鑼、笛などで形成されたサインワインと呼ばれる伝統的な楽団の演奏に合わせ踊り、諸々の精霊を降霊させる。信者は霊媒師の踊りの合間に不幸除去や商売繁昌を願い、相談するのだ。近年、霊媒師はトランスジェンダーの男性が多くなり、綺麗に着飾った男性たちが集まる事でも有名になっている。この祭りの期間中、タウンビョンではサインワインの演奏が休みなく鳴り響いている。

まだまだ雨量の多い第六月のトータリン月（八月から九月頃）には王朝時代から始まったボートレースが行われる。マンダレーの湖では





カティンの儀礼ではさまざまな品が僧院に寄付される



ダディンジュ月の灯明祭



ダザウンモン月に行われる熱気球祭り

サインワイン楽団が演奏し、レースを盛り上げる。このお祭りは健康を祈願し、民族意識を高め、心をひとつに固めるという願いが込められているのだそう。

第七月ダディンジュ月（一〇月から一一月頃）の満月をもって安居が明ける。そして安居の間許されなかった得度式や還俗、結婚式が行われ始め、庶民の暮らしは賑やかになってゆく。満月の夜、どのパゴダ（仏塔）の境内でも灯明祭が行われ、ゆらめく灯で普段より数段明るく感じられるだろう。そして一心に祈りを捧げる敬虔な仏教徒の姿に出逢うことだろう。灯明祭が行われるのは、安居の間、お釈迦様が天界にいる母親に教えを説き再び地上へ戻る際に道を照らすためだという。また、親、年長者や先生に礼拝して贈り物をする習慣がある。

雨季が終わり乾季に入る第八月のダザウンモン月（一一月から一二月頃）は行事が目白押しだ。前月ダディンジュ月満月の翌日からダザウンモン月満月までの一カ月間、僧院に布施をするカティンという儀礼が行われる。職場や地区ごとでお金を集め、僧衣、托鉢の鉢や洗面道具などの日用品また紙幣などがクリスマスツリーのように木枠に吊るされ僧院まで運ばれる。見事な飾りつけに目が釘付けになるだろう。満月の前日には一晩で袈裟を織りあげるコンテストがヤンゴンのシュエダゴンパゴダで行われる。またダザウンモンの満月の夜も灯明祭が行われ、パゴダは多くの参拝者であふれかえる。シャン州のタウンヂーでは様々な形の熱気球を上げるコンテストも開催され観光客で賑わう。

第九月のナドー月（一一月から一二月頃）に





ナガ族の新年祭



ピャードー月は稲刈りの季節

## ひょうどう ちなつ

ミャンマーをライフワークに撮影する写真家。  
また、ビルマ語通訳・翻訳も行う。



芸能を披露するザッでは男性ダンサーが魅了する。  
ダバウン月のパゴダ祭りにて



ダボウドゥエー月の得度式。男子仏教徒は一生のうち一度は出家をするといわれる

は「文芸作家の日」が設けられていて、この一年に出版された本に賞が与えられる。この時期作家や識者による講演会も各地で開かれる。また道路を夕方から封鎖し、屋外で高僧による説法会が夜遅くまで行われるのも、まったくといっていいほど雨が降らないからだろう。

涼しく過ごしやすい第一〇月のピャードー月（二月から一月頃）には王朝時代から始まった武術大会が催されていたが近年は開催されなくなった。農村部は米の収穫時期で、稲刈りや脱穀する姿がみられる。サガイン地域では多くの支族に分かれているナガ族が一同に集合し、新年祭が開催される。固有の民族衣装を眺めるだけでも飽きないだろう。

年間を通じて最も寒い第一月のダボウドゥエー月（一月から二月頃）には、収穫を終えた村人が大きな鍋でタマネという餅菓子を協力して作り、贈答しあう習慣がある。タマネにはシヨウガ等が含まれており、身体を温め健康に良いといわれる。農家では収入を得る月で、得度式をする家が一気に増えるのはこの月からだ。

暦の最後、第二二月のダバウン月（二月から三月頃）には各地でパゴダ祭りが行われる。会場ではさまざまな夜店や移動式遊園地が出て人々を楽しませる。またザッと呼ばれる芸能を披露する仮設小屋が建てられ、歌や踊り、喜劇や古典劇が夜を徹して繰り広げられるのだった。こうして気がつけば一年はあっという間に過ぎ去ってしまう。「人生楽しくいうよ」とミャンマーの人たちの声が聞こえてきそうだ。